

## 沖縄県内のインターナショナルスクールに通う 子どもの読書記録の分析

宮 城 利佳子\*

### How do children who go to the international school in Okinawa learn reading English books? —The analysis of children's reading logs—

MIYAGI Rikako

#### 要 旨

沖縄県内には、米軍関係者が多くいることから、多くのインターナショナルスクールが存在している。そして、英語教育への関心の高まりから、日本人でインターナショナルスクールへと通う子どもも増加している。インターナショナルスクールに通う英語を母語としない子どもが、英語で読書を行うようになる過程を明らかにすることは、日本の学校教育においてよりよい英語教育を実施する際の助けとなるであろう。本研究では、2人の子どもの読書記録の分析を行った。

#### 要 約

本研究では、インターナショナルスクールに通う日本人の子どもがどのように英語で読書を行うようになっていくのかについて、2人の子どもの10年分の読書記録を基に分析を行った。その結果、子ども自身の好みによって、家にある本の中から読みたい本を選び取っていく様子が示された。そして、その選書の際には、親や先生のすすめよりも、身近な友達が読んでいることが影響することが示唆された。また、幼児用の簡単な絵本も、子どもが自分で英語を読み始める時期には役立つことも明らかになった。さらに、課題として決められた一定の時間の読書を行うことは、子どもが好きな本を見つけるきっかけになることや、電子書籍リーダーを使用することは、わからない言葉の意味を簡単に調べやすくすることにつながり、読書量を増やす可能性があることも示唆された。日本の小学校における外国語及び外国語活動においても、教室内や図書館に、様々なレベルの様々な分野の本を大量に用意しておくことで、子ども自身が自分にあった本を選ぶ助けとなると考えられる。初期の段階では、担任の先生等による読み聞かせが必要であると考えられるが、子どもが読みを習得し、本の内容に魅力を感じ始めると、指導者の英語力を超えて、語彙を身につけ、読書をす

\* 小田原短期大学保育学科通信教育課程

ることが可能になってくると考えられる。

キーワード：インターナショナルスクール、読書、多読、バイリンガル、洋書

## 問題と目的

急速に進む国際化によって、日本人が英語力をつける必要性は、より高まってきている。そして、子どもをもつ保護者も、子どもに英語力をつけさせたいと感じるようになってきている。ベネッセコーポレーションの第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)報告書(2007)によると、22.7%の保護者が小学校英語に「とても関心がある」と答え、54.9%の親が「まあ関心がある」(N=4,718)と答えており、小学校英語に対して、多くの保護者が関心を持っていることがわかる。そして、18.8%が学校外での英語学習を行っており、地域別に見ると、大都市では22.4%、中都市では21.2%、郡部では13.1%が学校外で英語学習をさせているということが明らかになっている。

多くの保護者が英語教育に関心を持っており、学校外で子どもに英語学習をさせているという状況の中で、平成20年3月に告示された小学校学習指導要領(文部科学省 2009)で小学校5年生及び6年生において、初めて外国語活動が取り入れられることとなった。そして、平成29年3月に告示された新しい小学校学習指導要領(文部科学省 2018)では、3年生と4年生を対象に年間35時間(週1時間)の外国語活動、5年生と6年生を対象に年間70時間(週2時間)の外国語科を導入することになり、小学校での英語教育は拡大している。

ここで、小学校における外国語活動が小学校学習指導要領においてどのように扱われているのかについて、平成20年に告示された小学校学習指導要領と平成29年に告示された小学校学習指導要領を比較検討することによって、整理を行う。まず、外国活動の目標は、平成20年告示の小学校学習指導要領では、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」としている。一方、平成29年告示の小学校学習指導要領では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションをはかる基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持

ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」としている。これらを比較してみると、平成20年告示の小学校学習指導要領では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」とコミュニケーションの内容を明らかにせず、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら」と、慣れることを目標としているのに対し、平成29年告示の小学校学習指導要領では、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して」と言語活動の内容が4技能を指していることを明らかにし、「外国の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて」の知識を理解することや、「読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際にコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。」と読み書きの基礎を身につけることを明記している。

小学校教育では、小学校学習指導要領に沿って、外国語活動及び外国語の授業を行う必要がある。しかし、小学校外国語活動及び外国語導入に対する沖縄県の小学校教員の意識調査（2018 大城、深澤）によると、小学校教員は外国語活動及び外国語を指導することに対してあまり自信を持っていないことが明らかになっている（外国語活動に関して、「とても自信がある」が2%、「まあ自信がある」が21%、「あまり自信がない」が60%、「まったく自信がない」が17%である。外国語に関しては、「とても自信がある」が2%、「まあ自信がある」が14%、「あまり自身がない」が59%、「まったく自信がない」が25%である。アンケートの対象者数は451人、回答数は不明である。）。そして大城・深澤（2018）は、小学校教員が外国語活動及び外国語を指導することに対して、あまり自信をもっていない要因として、教員の英語力が大きく関係しているのではないかと示唆している。これは、「とても自信がある」「まあ自信がある」と答えた者の割合が、教員が自己評価した英語力が1級の者では100%、準1級の者では57.2%、2級の者では37.7%、準2級の者では25.3%、3級の者では10.4%、4級の者では4.1%、5級の者では7.9%であったことによる（なお、大城・深澤（2018）は、教員が、自分自身の英語力を2級以上であると評価した者は、全体の15%であったとしている。）。

つまり、沖縄県の小学校教員は、小学校外国語活動や外国語を指導するのに対し、自身の英語力に不安を感じ、指導をする自信がないということが明らかになっている。

一方、公教育での英語教育の導入を待たずに、インターナショナルスクールに通わせる親も多い。特に沖縄県では、米軍基地があることにより、米軍関係者や両親のどちらかが外国籍の者を中心に、英語での教育を受ける必要性から、インターナショナルスクールに通わせる者が多い。

インターナショナルスクールに通わせる目的は、様々であり、一義的に英語教育のためだけであるというわけではない。東本（2018）は、過去に海外生活を経験し、日本へ帰国後、

子どもをインターナショナルスクールへと通わせている4家庭を対象とし、子どもの教育機関としてインターナショナルスクールを選択した理由についてインタビュー調査を行っている。そして、その結果、「多文化共生的な環境の魅力と異文化適応能力の育成」をインターナショナルスクール選択の理由としており、「単に語学力の向上や保持を目的としているのではなく、友人や先生との出逢いを通してネットワークを拡げ、言葉の背景にある社会文化的な要素に適応したコミュニケーション能力を身に付けるために、インターの学習環境を選択している」ことを明らかにしている。しかし、インターナショナルスクールに通うきっかけが何であれ、インターナショナルスクールに通うことにより、多くの子どもは、英語力も身につけている。

筆者は、2人の子どもを6年間インターナショナルスクールに通わせた経験があり、2人の子どもの英語力がこれまでの日本の中高における英語教育で身に付く英語力とは異なることを実感している。具体的にいうと、インターナショナルスクールで身に付く英語力の特徴は、英検や日本の学校の定期テストで測られるような、比較的短い高度な文章を読んで理解する力や文法力ではなく、大量の英語を読んだり聞いたりする力であるのではないかと捉えている。そこで、両親が日本人である2人の子どもが、英語で読書をするようになる過程を明らかにし、小学校教育で子どもが外国語活動及び外国語で、英語で読書を行うことができるようになるためには、どのような要素が必要であるかについて検討したい。そうすることで、小学校教員自身が英語力に自信がない場合でも、子どもが読書によって、それぞれの英語力を伸ばすことができるのではないかと考えるからである。読書によって、英語を身につけていく過程を明らかにすることは、小学校教育における外国語活動をどのように実施することが子どもと小学校教員にとって有意義であるのかについて示唆を与えると考えられる。

## 方法

対象A：筆者の長男であるAは、沖縄県内で出生し、9ヶ月から沖縄県内の認可外保育園に通った。その後、1歳0ヶ月時に、地域の公立保育所に入所し、3歳6ヶ月時に、私立幼稚園へ移り、4歳3ヶ月時にインターナショナルスクールブリッジプログラム（4歳児クラスが始まる前に、英語が母語でない子のみが参加する約2ヶ月のプログラム）へ参加し、6年間インターナショナルスクールへと通学し、5年生の時に、公立小学校へと転校した。

インターナショナルスクール入学以前に、英語にふれた経験はなかった。インターナショナルスクールでは、4歳児クラスの間は、日本人のエイドが常に教室内にいて、担任の先生が英語で喋ったことを日本語で伝えている。4歳児クラスの担任は、教員歴23年目のベテランであり、日本語を理解することはできるが、子どもの前で日本語を発することはない。5歳児クラスからは、エイドによる通訳はない。

Aは、本が好きで、1日中、読書をしている。乳児の頃から、読み聞かせを好み、字が読めない頃から、一人で本を眺めることが好きであった。ひらがなの読みを獲得した5歳6ヶ月から、自分で本を読むようになった。

対象B：筆者の長女であるBは、沖縄県内で出生し、1歳4ヶ月から、地域の公立保育所に通い、2歳4ヶ月時に、私立幼稚園へ移り、2歳9ヶ月時にその年に新設されたインターナショナルスクールの3歳児クラスへと入園した。そして、6年間インターナショナルスクールへと通学し、3年生の時に、公立小学校へと転校した。

インターナショナルスクール入学以前に、英語にふれた経験はなかった。インターナショナルスクールでは、当初、3歳児のみのクラスであったが、学年途中より、4歳児との混合クラスであった。4歳児クラスまでは、日本人のエイドが常に教室内にいて、担任の先生が喋ったことを日本語に伝えている。3歳児クラスの担任は、フィリピンから来たばかりであり、日本のインターナショナルスクールでの経験はなく、日本語を一切理解することはできなかった。5歳児クラスからは、エイドによる通訳はない。

Bは、読み聞かせでも、英語の本の方がいいと主張し、ひらがなの読みを獲得後も英語の本を好んで読んだ。自ら日本語の本を読むようになったのは、5年生になってからであった。

#### インターナショナルスクールの特徴：

A、Bの在籍した学校は、沖縄県が本土復帰する以前に設立された学校であり、A、Bが入学した時点で、設立から50年以上が経過していた。幼稚園から高校までの一貫校である。

(Aの入学時点では4歳児クラスへの準備クラスからのスタートであり、Bの入学時に3歳児クラスが新設された。)小学校は1年生から5年生までであり、中学校は6年生から8年生、高校は9年生から12年生までである。幼稚園と小学校は、各学年2クラスずつあり、1クラス15人程度である。

地域的な影響もあり、親が軍属である子も多い。(親が、軍人である場合は、基地内学校は無料であるが、シビリアンである場合は、高額の学費が必要であり、さらに空きがある場合にのみ通うことができるという制度であることも影響している。)アメリカ、日本以外に、韓国、中国、インド等、様々な国籍の子が在学している。大学院大学の関係者の子弟も多く在学している。親が英語のみを喋る家庭の子は、英語のみを喋るが、児童・生徒の大半は、バイリンガル、トライリンガルである。4歳児クラスは、最初は日本語を使用することができるが、徐々に、教室内では英語のみを使用すること、外遊びの際も英語を使用すること、と段階を踏んで、英語のみの使用へと切り替えていくように指導されている。

幼稚園では、遊びやクラスでの活動を通して、自然に英語を学ぶようにと工夫されている。ただし、ここでいう遊びは、日本の保育における遊びとは異なり、用意されているおもちゃで遊ぶことや、先生主導のゲームであることも多い。

幼稚園、小学校のどちらも、午前と午後に長い休み時間が設定されており、クラス全員が外に出て遊ぶ。ここでの遊びは、公園のように遊具で遊ぶことがメインであり、日本の保育における遊びとは意味合いが異なる。休み時間は、担任の先生は教室に残り、エイドが子どもたちと園庭へ出る。エイドは、子どもと遊ぶのではなく、子どもがルールを守っているか、

安全に遊んでいるかを見守っている。遊びの終わりに、予告はなく、笛の合図がなるとその場で動きを止める。そして、次の笛の合図で一列に並び、無言で教室へと移動するということが徹底されている。

各学期は、4学期に分けられており、学期の中間と最後に、親に対して成績表が渡される。また、年に2回、親と先生の面談があり、うち1回は、生徒自身が自分の学びをポートフォリオに入れて、親へと説明するというかたちをとっている。

小学校2年生以降は、日本語の授業があり、各自のレベルに応じたクラスで日本語を学んでいる。

当初、ESLのクラスはなかったが、A、Bが在籍した最後の年度にリタラシークラスが作られ、著しい遅れが見られる、または保護者が希望する場合、リタラシークラスでリーディングを学習することになっていた。

お昼は、給食にするか、お弁当にするか、各自で選ぶことができる。お弁当の内容も各家庭によって、大きく異なり、買ってきたお弁当やサンドイッチを持つ子もいる。食後に、自分のこぼしたものを拾うことは、ルールとして決められている。一方、清掃は、全て外部業者へと委託している。

ほとんどの生徒がスクールバス、または自家用車で通学している。アフタースクールは、学校がある日のみであり、人数も20人以下と少ない。

日本の幼稚園や小学校と同様に、遠足、学習発表会、運動会、誕生会、卒業式も行われている。但し、その活動の詳細は、日本とは異なっている。入学式は行われておらず、幼稚園は初日にクラスで短いオリエンテーションがあるのみで、そのまま通常の保育へと入る。小学校は、平日の夜に、オリエンテーションが行われる。以下に、行事について述べる。

遠足は、参加したい親のみ参加し、学校のバス、または自家用車で現地集合である。動物園や水族館等でもクラス全体でまわるということではなく、親を中心に小グループでまわり、お昼も各自が食べたい時に食べ始める。現地でお弁当を購入する者や、お金を入れて遊ぶ遊具等で遊ぶ者も多い。

学習発表会は、キリストの生誕劇であり、学校全体で一つの劇を作る。ドレスアップして、大きなホールで、歌やダンスをする。幼稚園の進級、卒園の際にもホールでドレスを着て、歌と各自の夢の発表が行われる。但し、卒園式後も通常通り保育があり、最終日は、クラスで一品持ち寄りのパーティーが開かれる。このときに持ち寄る料理は、手作りのものでも、市販のものでよい。

運動会は、幼稚園では、ファミリースポーツデイという形で、親と一緒にレクを楽しむという形態で、隣接する公園で行われる。レク後は、各自お弁当を食べ、家から持参したボール等のおもちゃや公園の遊具を使って遊ぶ。小学校は、スポーツ大会という形で、様々な競技にチャレンジしていく。但し、この競技は、事前に練習を行っているわけではなく、リンボーダンスや靴飛ばしといった遊びの要素が大きい競技である。後日、競技結果をもとに、表彰

が行われる。親の参観は自由である。

誕生会は、誕生日の子の親が、学校に食べ物を持ってきて、クラスの子に、鉛筆やお菓子が入った小さなプレゼントを配る。

日本の幼稚園・小学校とは異なる行事として、学校にパジャマを着ていくパジャマデイや、読書指導の一貫として行われるキャラクターパレード（本の登場人物に仮装する）、資金造成のために行うウォーカーソンや大規模なバザーがあげられる。

#### 分析対象：

Aが、インターナショナルスクール入園前の2歳10ヶ月から12歳9ヶ月までの時期に、筆者が毎日、SNS上でつけていた読書記録をPDF化したものを分析対象とする。筆者はAが1歳8ヶ月時から、毎日Aの読書記録をつけており、つけ忘れた日も次の日に必ずAの読書記録をつけていた。読書記録は、読んだ本の記録と日記で成り立っている。その中で、英語の本の読書記録と関連する記述を中心に分析を行う。また、インターナショナルスクールで、その時期に行われていた指導も、あわせて分析対象とする。

Bについても、同様に、インターナショナルスクール入園前の1歳2ヶ月時から11歳1ヶ月までの時期に、筆者が毎日、SNS上でつけていた読書記録をPDF化したものを分析対象とする。Bの読書記録は、Bが出生時からつけている。同様に、インターナショナルスクールで、その時期に行われていた指導も、あわせて分析対象とする。

これらの記録を元に、A、Bがそれぞれ月ごとに読んだ本について検討する。読書量は日によって、ばらつきがあるので、月ごとの平均読書冊数や特徴を検討する。また、読書力が高まるにつれ、1冊あたりの分量が増え、冊数のみでは比較することができないため、単語数や本のレベルについても検討する。

A、Bが通ったインターナショナルスクールでは、読書指導において、AR level という指標が用いられていた。STAR Readingというテストによって子どもの読書レベルを測定し、最近接領域（ZPD）の本の中から、1冊は本を選ぶようにと指示している。そして、読んだ本の内容について、ARテストという多肢選択の内容確認テストを行い、正解数と読んだ本の長さに応じたポイントをためていくようにと指導していた。

#### 倫理的配慮

読書記録の分析について、調査対象児であるA、BとA、Bの父親に対して、研究の目的を口頭で説明し、同意を得た。

#### 結果と考察

各月の読書量をTable 1に示した。日によってばらつきがあるので、一月あたりの読書冊数について検討する。

Table 1 月別読書冊数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	
2009年	5	24	152	18	64	22	1	49	14	33	7	29	418	
2010年	13	0	1	0	0	0	0	0	5	39	38	51	147	
2011年	51	36	74	65	111	28	61	62	62	27	33	40	650	
2012年	53	22	55	46	27	23	13	18	31	13	28	10	339	
2013年	A	10	3	10	3	1	6	4	11	26	23	10	7	114
	B	17	6	12	5	4	8	6	13	9	8	9	9	106
2014年	A	7	3	9	3	15	9	1	0	0	12	6	3	68
	B	6	8	7	6	20	14	2	0	3	10	4	5	85
2015年	A	6	1	7	1	0	5	10	2	4	4	6	6	52
	B	6	3	7	3	8	22	26	18	12	19	20	15	159
2016年	A	6	10	6	8	8	8	14	13	28	12	16	13	142
	B	11	8	8	6	25	23	42	40	6	10	5	3	187
2017年	A	22	15	28	3	10	5	4	3	15	8	5	3	121
	B	6	3	8	8	4	6	5	2	6	10	7	6	71
2018年	A	6	2	2	3	6	1	3	2	3	10	23	4	65
	B	5	8	7	5	2	1	3	2	1	4	2	1	41

Table 1 から分かるように、各月の読書冊数には、かなりばらつきがある。読書冊数のばらつきには、様々な要素が関係している。

ここで、Aが英語の読みを獲得するまで（前期）、Aにお気に入りのシリーズができ読書量が増えるまで（中期）、Aにお気に入りのシリーズができ読書量が増えた後（後期）の3期にわけ、それぞれの時期について読書の特徴を記述し、考察する。この3期に分ける理由は、周りの大人による援助の質が、これらの3つの時期で大きく異なるであろうと考えられるからである。前期は、一人で英語を読むことはできないので、周りの大人による援助が絶対的に必要な時期である。そして、中期は、一人で読むことはできるが、お気に入りのシリーズ等がなく、読書の楽しみを見いだせていない時期であり、大人が選書を手伝い、読書を促す必要がある時期である。後期は、好きなシリーズがあり、自分から読書へと向かう時期であり、大人の援助があまり必要でなくなる時期である。

(1) 前期 A、Bへの英語の絵本の読み聞かせを始めてから、Aが読みを獲得するまで  
(2009年1月～2012年4月まで)

＜英語絵本の読み聞かせの始まり＞ 2008年12月～2009年2月

(A：2歳9ヶ月～2歳11ヶ月、B：1歳1ヶ月～1歳3ヶ月)

Aは、2010年1月に、インターナショナルスクールへの入園面接を受け、2010年6月に4歳準備クラスへと入園した。よって、2009年1月から2010年1月までは、インターナショナルスクールへの入園と関係なく、母親が通常の読み聞かせの一貫として、英語の絵本を読んでいた時期である。当時のAは、日本語での読み聞かせが大好きであり、一日に10回以上、絵本を読んで欲しがっていた。筆者が、2008年12月（A：2歳8ヶ月時）に、図書館から英

語の絵本を借りてくるまでは、日本語の絵本だけの読み聞かせを行っていたため、英語の絵本に対しては、当初、抵抗感があった。筆者の記録には次のようなエピソードがある。

「Aに対して、赤ちゃんの頃から読んでいた絵本の英語版を借りてきたが、Aは拒否する。赤ちゃん絵本であったため、Bに対して読むという形をとると、動物の鳴き声のところで、Aは聞きにくる。」

このエピソードより、Aは読み聞かせを聞いてはいるが、絵を見て、絵本を読んでもらうことを楽しむという状況ではなかったと考えられる。その後、筆者は、「そのうち、興味が出るかもしれない。」と考え、自然に目につく形で、他の絵本と並べて家に置き、A、Bのどちらかが持ってきたときのみ、読み聞かせるという形をとって、英語の絵本の読み聞かせを行うようになる。

また、この時期のAの英語に対する拒否感を表すエピソードとして、以下のエピソードが記録に残っている。

「レオ＝レオニの絵本である『Swimmy (1963)』が入っているDVDを図書館から借り、何度か日本語音声で見ていたものを、英語でも見せてみた。かけはじめに、Aは、『やったー、A、これが見たかったの』といって見始めたものの、DVD終了後、Aは、泣いて布団まで行った。すぐに泣き止んで、お気に入りの桃太郎のCDをかけてトリクエストしたものの、なんだか悲しそうな表情。それで、私（筆者）は、『ごめんね、A、英語だったのが嫌だったの?』と聞くと、Aは『うん』といって、ニコニコわらって、日本語で見て満足して寝た。はっきり、もう日本語と英語の区別がついているので、本人がストレスを感じずに楽しめるように気をつけなくては。」

筆者は、Aに、英語絵本の読み聞かせを楽しめるように、本人の興味に応じて読むことを強く意識している。2008年12月～2009年2月は、図書館の本が中心であり、回数もそれほど多くはない。この時期の絵本は、日本でよく読まれている絵本の英語版が中心であり、松谷みよ子の赤ちゃん絵本（『いないいないばあ』、『もうねんね』、『いいおかお』）英語版やエリック＝カールの絵本『できるかな？あたまからつまさきまで』や『くまさんくまさんにみてるの?』『パンダくんパンダくんなにみてるの?』といった絵本が中心である。

<短い英語絵本を大量に購入> 2008年3月～2008年12月

(A：3歳～3歳9ヶ月 B：1歳4ヶ月～2歳1ヶ月)

母親は、Aへの誕生日プレゼントの1つとして、英語の絵本セットを購入した。日記の中で、「Aが、いないいないばあの絵本を、『dog, peek a boo』とBに対して読んであげる様子が見られた。簡単な絵本であれば、AがBに対して読んであげるのではないかと、思うので、絵本を購入したい。っていうのは建前で、ほんとは、私自身が、英語の絵本は、日本語の絵本と違って、私も読んだことがない本が多く、表現も新鮮で読むのが楽しいから、欲しい。」  
「欲しいな、と思ってたら、たまたま、今日入った本屋で洋書半額セールをやっていたから、

とりあえず、買うことにする。」と記している。

家にある英語の絵本が増えたことにより、英語の絵本を読む回数が飛躍的に増加した。Aは、エリック＝カールの英語の絵本を借りてきたのをきっかけに、「これ（日本語のエリック＝カールの絵本）も、英語で（読んで）」と差し出してくることが増え、と英語の表現に興味を持つようになる。一方、セットで買った1ページに1行程度の英語が書かれた8ページ程度の短い絵本については、「これは、Bの。」と行って、「はい、Bに（読んで。）」と持ってくるが増える。

Bは、「Bの。」として渡されることが多いからか、英語の絵本をととても気に入っている。当時、日本語の赤ちゃん用の短い絵本が、家にほぼなく、Aが読む少し長めの絵本が多かった。よって、英語の絵本の方が、短くて、Bが最後まで聞きやすく、理解しやすかったことも影響しているとも考えられる。

また、この時期の4月に、筆者は大学院に進学しており、日本語、英語ともに、4月以降の読み聞かせ冊数は減少している。

その後、英語の絵本の新しいセットを買えば、一時的にAによる読み聞かせのリクエストが増えるが、やはり、Aの読み聞かせのリクエストは日本語中心であり、Bは英語の絵本を持ってくるという状態が続く。この時期、少しずつではあるが英語の絵本の読み聞かせは続いている。

この時期は、Aは、書店で購入したGraded Readers と呼ばれる子どもが自分で読めるように作られた本を気に入って、読んで欲しがる。特にBiscuitという名前の子犬が主人公の絵本を好む。Biscuit の鳴き声に面白さを感じているようであった。

一方、Bは、Aへの誕生日プレゼントに購入した1ページ1行程度の24冊セットの本が中心である。また、8月にはsight word readers という3語文の反復のみで構成されている25冊の本のセットもよく読んで欲しがる。

Aはストーリーがある絵本を好むのに対し、Bは短い単純な絵本を好む。年齢の違いによるものではないかと推察される。

<インターナショナルスクールの入園面接から入園直後> 2010年1月～2010年8月

(A：3歳10ヶ月～4歳5ヶ月 B：2歳2ヶ月～2歳9ヶ月)

筆者は、A、Bの父親が、アメリカ留学の希望があったため、Aのインターナショナルスクールへの入園を考え、1月末に入園面接を実施してもらう。面接は、校長先生によって行われ、靴や星等の絵がついたカードを見せ、できれば英語で、わからなければ日本語で答えるようにという形で行われた。面接の際に、Aは、ほとんどのカードについて、英語でも日本語でも答えずに、一枚のみ、英語で答えた。そのことについて、「英語を話す人であることは認識し、英語で答えないといけないと思ったのかな。」と筆者は推測している。その際に、「入園前に、親子で英語で遊んでおくのはとてもいいことだが、そんなに特に意識せずに、日本語の絵本

をたくさん読んであげて、普通に子育てをしていればいい。」と校長先生に言われる。オフィスにいる日本人には、「英語ができる状態に入って来る子が多いですよ。近くにプリスクールやデイケアもあるので、そちらに通っていた方がいいです。」と助言を受けるが、「頻繁に転園させるよりも、これから、しばらく英語環境にある園に通うわけだし、そのままでもいいだろう。日本語の方が心配になるかも。」と英語の絵本の購入を控えるようになる。

そして、2010年6月にAが、4歳準備クラスへと入園する。続いて、4歳準備クラスの送迎に同伴していたBを見て、Aの4歳準備クラスのエイドをしていた先生に9月から新設される3歳クラスへ入園してはどうかと声をかけられる。8月初めに、Bも入園することになり、9月から、Bは3歳クラス、Aは4歳クラスへと通うことになる。

この時期、「園で、長時間英語で過ごしているのだから、家庭では日本語にたくさんふれさせたい。」と、日本語の読み聞かせ量が増加している。それに伴い、家で英語の本を読む機会がほぼなくなる。

#### <園から借りてくる絵本を中心に読書量が増えていく時期> 2010年9月～11月

(A：4歳6ヶ月～4歳8ヶ月 B：2歳10ヶ月～3歳)

Bが園から時々、本を借りてくるようになる。アメリカの優れた絵本に与えられるコルデコット賞を受賞した絵本である『Owen』や『Owl moon』等の絵本を借りてくる。

園から、毎日15分程度、親子で、英語に取り組む(絵本でも、テレビでも、やり取りでも内容は自由。)宿題が出されるようになったため、ほぼ毎日英語で読み聞かせを行う。

この時期の絵本は、<短い英語絵本を大量に購入>した時期の本に加えて、園から借りてくる本、新たに購入した絵本が中心である。Aも、英語の絵本を聞いてはいるが、Bの方が好んで聞いている。Aは、長い日本語の児童書を聞くことを好み、英語の絵本は、Bがリクエストするから一緒に聞いているという程度である。園では、クラス内に絵本コーナーがあり、毎週、図書館に行く時間がある。この時期の読書指導の詳細は明らかではない。毎月、その月のテーマにそった読み聞かせは行われている。

#### <最初のお気に入りのシリーズができる時期> 2010年12月～2011年4月

(A：4歳9ヶ月～5歳1ヶ月 B：3歳1ヶ月～3歳5ヶ月)

Bが借りてくる絵本によって、読書の幅が広がったことを感じた筆者は、Aの担任に対し、Aのクラスは本の貸し出しがないのかについて問い合わせる。しかし、4歳児クラスは自分の借りた本に対して、まだ責任を持つことができないとの理由で本を借りることはできなかった。それで、筆者は、A、Bのために、さらに本を購入するようになる。Bが園で借りてきた絵本や知り合いからの情報を参考に、赤い大きな犬が主人公であるCliffordシリーズや、スクールバスを使って、小学生が探検に行き、科学的な知識を学ぶMagic school busシリーズ、イギリスの英語教科書として有名なOxford reading tree シリーズをはじめとして、

様々な絵本を購入する。また、園のバザーでもたくさんの絵本を購入している。

Aは、Oxford reading tree シリーズを大変気に入る。Oxford reading treeは、ステージ1からステージ9に分かれており、主人公の兄弟が、魔法の鍵によって冒険にでるストーリーである。Aが、ステージ5、6を中心に毎日読んで欲しがるようになる。なお、公式ホームページによると、Oxford reading treeのステージ5、6は6歳から7歳の子が自分で読むレベルの本である。一冊あたりの語数も300語程度から700語程度で、これまで読んでいた英語の絵本よりも少し長めである。

なお、2010年12月に、アルファベットがどの程度読めているかについてのアセスメントが園で行われており、Aは24文字の大文字、Bは26文字すべての大文字が読めるということであった。なお、1月からは、教室内では、英語のみを使用することということになっていた。ただし、当時のAの英語での発話は多くなかった。そして、3月の参観時、Aのクラスで英語ネイティブではない子の発話を筆者が観察したところ、自分に関することは、すべて、I'm a ～、I'm wantといった発話をしていて、しかし、子どもたちは、教室内では英語で会話しており、保育者の指示も聞き取って活動していた。

<お気に入りのシリーズから読書が広がる時期> 2011年5月～2011年8月

(A：5歳2ヶ月～5歳5ヶ月 B：3歳6ヶ月～3歳9ヶ月)

BがOxford reading tree シリーズを気に入りはじめ、好んで読んで欲しがる。AもBも、好んで読んで欲しがるため、ステージ7も購入する。赤ちゃん用のセット絵本をリクエストすることはほぼ無くなり、ストーリー性の高いシリーズ絵本のリクエストが増加する。Froggy シリーズ (“Froggy goes to camp” “Froggy’s baby sister” 等の何冊かの絵本。カエルの子どもが主人公である。) や、Black lagoon シリーズ (“The librarian from the black lagoon” “The dentist from the black lagoon” 等のシリーズ。主人公の男の子の学校に来る転校生や新しい先生、ペット等が恐ろしいものであったらどうしようと言う男の子の想像について書かれており、最後は、普通の優しい転校生、先生、かわいいペットであったという展開のシリーズ絵本である。) 等を気に入る。特にBlack Lagoon シリーズは、A、Bともに気に入る、何度も読んで欲しがり、シリーズすべてを購入した。筆者にとっては、Black lagoon シリーズは、見慣れない英単語が多く、少し難しく感じたが、A、Bにとっては、とても面白い本であったようである。

2011年8月頃から、筆者は、チャプターブックを何冊か購入している。その動機を、日記の中で、「A、Bが好きなシリーズがもっと増えて、語彙が増えて欲しい。絵本は一冊あたりが短くて高いので、チャプターブックに移行してくれると嬉しい。」と書いている。そして、実際に何冊かを読み聞かせているが、「絵がないと、まだ理解が難しい。私も長い英語の本を読み続けるのは大変だ。」と書いており、9月からは、また絵本に戻っている。但し、Ricky Ricotta’s mighty robot は、チャプターブックという形をとりながらも、すべてのページ

に挿絵があり、1 ページあたりの英文の量も絵本と変わらないことから、繰り返し読んでいる。

この時期の特徴は、ストーリー性のある絵本を好むようになり、好きなシリーズからどんどん読書量が増えたことである。よりよい読書環境にするために、子どもの好みに合わせて多くの本を揃え、親子で読書を楽しんでいる。

〈読みの習得へと向かう時期〉 2011年9月～2012年4月

(A：5歳6ヶ月～6歳1ヶ月 B：3歳10ヶ月～4歳5ヶ月)

この時期は、Aが5歳児クラスに進級し、園で、3 letter words とよばれる、母音、子音、母音でできた3文字の語の読みを習い始める。この時期に、Aのクラスでは、音読の宿題として、短い絵本の形をとったプリントが配られるようになる。Aは、積極的には読もうとせず、Bが読みたがる。Aのクラス、5歳児クラスからは、好きな本を読んだ後の理解度を確認するARテスト（それぞれがコンピュータを使って試験を受ける形式）が時々行われている。ただし、目標ポイントや点数が決まっている訳ではなく、小学生になった後のためにテストの練習を行う、とのことであった。

また、この時期、Aは、ひらがなの読みを習得し、フリガナがついているものであれば、何百ページもあるような児童書でも自分で読むようになった。母親である筆者は、Bに日本語の絵本も読もうと誘うが、Bは、「これがいい！」と英語の絵本ばかりを持ってくる。

音読の宿題のために、〈短い英語絵本を大量に購入〉の時期に購入した絵本を一緒に読みはじめる。

引き続き、Oxford reading tree シリーズやFroggyシリーズ、Black lagoon シリーズをリクエストすることが多いが、Aが自分で図書館から借りてくる本の割合も増えてくる。Aは、2012年2月から、園でARテストの練習が始まり、週に2冊、1冊は自分のリーディングレベルにあったテスト用の本、もう1冊は好きな本を借りることになっていた。Aは、大抵、Dr.SeussのGraded readers (The cat tin the hat cooking with the cat等) と、ノンフィクションの虫や動物の絵本を好んで借りていた。自分のリーディングレベルにあった本を借りてきてはいたが、家では、母親に読んでもらうことが多かった。

この時期も、家にある好きなシリーズを繰り返して読むことが多かった。それに加えて、2012年4月からは、家に英語の図鑑も揃えたため、図鑑も好んで読んでもらいたがるようになった。

英語の読みを習得しはじめても、自分で読みたいという様子はあまりなく、母親に読んでもらうことが多い時期であった。

ここまで、前期を7期に分けて考察してきた。その結果、母親が、A、Bの好みにあう本を多く家に揃えることで、A、Bが本への興味を持ち、読書量が増えることが明らかになった。また、短い絵本は、英語があまり分からない時期だけでなく、読みを習得した子どもが

自分自身で読む時期にも必要であることが明らかになった。そして、単語が難しいといったことを子どもは感じずに、絵やストーリーが面白いものを好むことも示唆された。

(2) 中期 Aが英語の読みを獲得後、自分から読むシリーズができるまでの時期

(2012年5月～2014年3月) A：6歳2ヶ月～8歳 B：4歳6ヶ月～6歳3ヶ月

〈自分で読み始めるが、読み聞かせも聞きたがる時期〉 2012年5月～2012年10月

(A：6歳2ヶ月～6歳7ヶ月 B：4歳6ヶ月～4歳11ヶ月)

2012年5月にAが園から借りてきた本を、一文ずつ、母親と交互に読むことを提案する。4月に小学校の国語の教科書をもらい、母親と一緒に読んだり、交互に読んだり、音読の練習をしたことで、英語でもやってみたくなったのではと推測される。しかし、この時期は、あまり上手に読めずに、やはり読んでもらいたいと途中で止まることが多い。

2012年7月頃から、Aが自分で音読するという量が増加する。この頃、Rhyme の概念も理解し、言葉遊びをするようになる。Spider-man phonics fun やSuperman phonics fun といったバック型のケースに12冊の本が入った短いフォニックスを身につけるための本やfolk & fairy tale easy readers (15冊のリライトされた短い昔話) を好んで自分で読む。Oxford reading tree シリーズのステージ2も自分で読むことが多い。

2012年8月頃からは、Aの音読の真似をして、Bも音読をすることが増えてくる。Bは、アルファベットはすべて読め、短い単語や、3 letter words等のいくつかの単語は読める状態である。

Aへの読み聞かせは、引き続き、図鑑が多い (First encyclopedia of seas and oceans 等)。Bは、図鑑の読み聞かせは好きではない。その場において、少しは聞くものの、他の本をめくっていたりすることが多い。Aの音読の真似をして、Bも音読の真似をすることが増えてくる。

Aが自分で音読をすることが増えるにつれて、Aに対しての絵本の読み聞かせは減少していく。Bは、これまでと同じようにOxford reading tree の中でお気に入りのシリーズをはじめとして、他にもうちにある絵本の中で好きなものを読んでもらいたがる。

2012年8月頃から、Magic Tree House シリーズの読み聞かせを始める。このシリーズは、筆者が前もってセットで購入してあったところ、スクールバス内で友達が読んでいた本と同じ本であることにBが気づき、リクエストしたからである。そして10月まで、毎日少しずつ Magic Tree House シリーズを筆者が読み聞かせる。それ以外の読み聞かせは、Aのリクエストによって、家にある絵本を読んでいる。

〈Aが自分で読むようになり、Bへの読み聞かせが中心になる時期〉 2012年11月～2013年2月

(A：6歳8ヶ月～6歳11ヶ月 B：5歳～5歳3ヶ月)

Aの読書は、学校の宿題のための音読が中心になってくる。Nonfiction の短い絵本と学校から借りてくる本が中心である。日本語での読書量が増え、英語は、促されて宿題のため

に少しだけ読むという程度である。だが、自分で読めるから、と筆者の読み聞かせをあまり聞かなくなる。

Bは、自分では眺める程度で、筆者の読み聞かせを好む。家にある絵本が中心である。

〈Bが音読をし始め、Aが黙読へと移行する時期〉 2013年3月～2014年3月

(A：7歳～8歳 B：5歳3ヶ月～6歳3ヶ月)

2013年3月、Bも自分で読むと音読をしはじめ、毎日自分で本を読むようになる。2013年8月からは、Aは20分、Bは10分の読書が学校の宿題となり、まとまった時間、読書をするようになっていく。A、Bは、これまで読んできた短い絵本に加えて、少し長い絵本やOxford reading tree のステージ7を自分で読むようになる。さらに、Aは、Magic Tree House シリーズを自分で読み進めるようになり、20分で、本の7割程度を読み終え、次の日に残りを読み、余った時間は短い絵本を読むといったペースで読み進めるようになる。2人の本の好みが明確に分かれはじめ、家にある本のなかでも、それぞれが違うシリーズを好むようになる。

Aは、Magic Tree house シリーズの他に、Ricky Ricotta's Mighty Robot 等のシリーズを好む。また、日本の漫画の英語版も読むようになる。Aは、日本語の読書が中心であり、宿題の20分間のみ、英語を読むという状態であった。Aは、促されない場合は、英語での読書をせず、また、インターネット上にある絵本を読むサイトで読書することを好んだ。

Bは、絵本を好む。「学校で見た絵本が家にあると読みたくなる」と発言している。また、伝記漫画の英語版も好んで読む。

2014年2月、Bに日本語の本を読むように促すと、「ひらがなは読めるから大丈夫。」と嬉しそうに言って、文字を見た後、「これ、ここからこうやって読むの？（上から下に読むの？）B、目が上から下には動かない。」と言って泣く。この時期には、Bは、日本語より英語を読む方が楽に感じていた。

ここまで、中期を3つの時期に分けて、検討してきた。学校で見たことがある本、友達が読んでいた本というきっかけで本に興味を持つことが多い。子どもの手が届くところに本がある重要性が示唆された。

(3) それぞれにお気に入りのシリーズができ、読書量が増加する時期

2014年4月～2018年12月 A：8歳1ヶ月～12歳9ヶ月 B：6歳4ヶ月～11歳1ヶ月

〈読書速度がかなり速くなる時期〉 2014年4月～2015年5月

(A：8歳1ヶ月～9歳2ヶ月 B：6歳4ヶ月～7歳5ヶ月)

筆者は、A、Bの黙読のスピードがかなり速いと感じはじめ、隣でそれぞれが読むチャプターブックを読むと、筆者とほぼ同じスピードであると感じる。そして、一度に読める量が

筆者を既に超えていると感じ始める。2014年5月には、Bが学校から本を借りてくるようになり、読書量が増加する。一方、7月から9月は夏休みで、読書の宿題がなかったことで、英語の読書がほぼ無くなる。学校からの宿題という形が、子どもの読書推進において重要であることがわかる。

＜Bにお気に入りのシリーズができ、読書量が増加する時期＞ 2015年6月～2016年5月  
(A：9歳3ヶ月～10歳2ヶ月 B：7歳6ヶ月～8歳5ヶ月)

2014年6月に、Bに電子書籍リーダーを購入する。当初は、ほぼ使用していなかったが、2015年2月にJudy Moodyシリーズを5月にJunie B Jonesシリーズを学校から借りてきて、続きを読みたがるようになり、2015年6月から電子書籍リーダーを用いて、Junie B Jonesシリーズを読み始める。その後、Franny K SteinのシリーズやJudy Moodyのシリーズをほぼ1日1冊ずつ読むようになる。そして、2015年12月頃からはA to Z mysteriesシリーズ、2016年5月にはAmber Brown シリーズを気に入るようになる。

Aは、学校で図書館の先生や友達に紹介されたシリーズを、借りて持って帰ってきており、週に2冊のペースで読む。自分から読みたいというよりも、宿題だから、2冊は読むという程度である。Aは、Box car children シリーズや古典を子ども向けにリライトしたシリーズを気に入り、何度か借りてきたため、購入を提案したが、特に読みたいわけではないと言っている。Aのクラスでの読書指導としては、クラス全体で同じ本を読み、先生が読み聞かせたり、映画化されたものをみたりという活動が行われていた。自分で本を書いてみる活動も行われていた。Bのクラスでは、同様にクラス全体で同じ本を読むことと、本を紹介するボードを家で作って発表することが行われていた。

この時期、Bの英語での読書量はかなり増加しており、時間があると読書をするようになっていく。そして、次から次へと本の購入をせがみ、読み進めている。読書のきっかけは、友達が読んでいたということが多い。筆者が薦めた本は、数分読んで、やめてしまう。

一方、Aは時間があると、日本語で読書をするが、英語では宿題の時間だけである。

＜Aも電子書籍を用いるようになり、A、Bが自分で本を購入したがる時期＞

2016年6月～2018年12月

(A：10歳3ヶ月～12歳9ヶ月 B：8歳6ヶ月～11歳1ヶ月)

Aは、2016年6月にインターナショナルスクールが夏休みに入り、そのまま沖縄県内の公立小学校へと転校したが、もっと読書力をつけて欲しいと思っていた筆者が、夏休み期間中も20分～30分の読書をするようにと、Warriors シリーズを紹介し、読ませた。最初の2冊は、Bの電子書籍リーダーを借りる形で読んでいたが、2016年7月には、A専用の電子書籍リーダーを購入した。当初は、読む速度も遅く、1日30分のみであったため、1冊を読むのに10日程度かかっていたが、次第に夢中になり、3日に1冊程度のペースで読むようになり、

外伝や短編も含めすべてのWarriorsを読むことになる。Warriorsは猫が主人公のファンタジー作品であるが、非常に厚い本であり、語彙レベルも、ARレベルで5.4～6.3と当時4年生が修了したばかりのAにとっては難しい本であった。このシリーズを読みはじめてから、Aの読書量は大幅に増加した。Warriosを読んで疲れたら、Wimpy kidシリーズを読むという姿がよく見られた。その後、何度も、WarriorsやWimpy kidシリーズを中心に再読を行う。

その後は、日本語の本を多く読む時期が時々あり、一時的に、英語の読書量が少なくなることはあるものの、好きなシリーズを再読している。最近では、2018年5月～11月にかけては、Harry potterシリーズをすべて読み、その後も、筆者からの紹介を受けたシリーズを中心に読書をしている。一方、WarriorsやWimpy kidは今でもよく再読している。

Bは、引き続き、気に入ったシリーズを繰り返し時間があると読んでいる。しかし、シリーズをすべて読んでしまうと、なかなか他のシリーズを読むことがなく、再読が多くなり、全体として読書量が減少する。2016年8月には、学校で見たことがあるとの理由で、Horrible Harryシリーズをすべて読んだ。その後は、読むのがないと、新しい本を読むことを渋っていたが、とりあえず、20分～30分、新しいシリーズを読むように提案し、The Naughtiest girlシリーズを読ませたところ、大変気に入って、シリーズすべてを読破し、その後、同じ作者のMalory towersシリーズ、St Clare'sシリーズと読み進んでいる。同じ作者の他のシリーズは、一度は読んでも再読することはなかったり、途中で読むのをやめたりと気に入ることはなかった。寄宿舎というテーマが好きだということなので、同じテーマの児童書を探してみたが、やはり、一度のみ、または途中でやめている。半年程、他の児童書を読むことがなかったが、友達から紹介され、2017年8月から、Land of storiesシリーズをすべて読んでいる。大変長い本であり、一冊読むのに1週間程度かかっていた。間に、少しずつ読むシリーズはあるが、Malory Towersシリーズ、St Clare'sシリーズ、Land of storiesシリーズを現在も繰り返し読んでいる。Bによると、「同じのを何回も読んでたら、後で分かることもあるし、だんだん分かってくる。言葉も覚える。」とのことである。子ども自身が満足するまで再読することを大事にしつつ、読書の幅を広げていく工夫が必要であろう。

この時期の、A、Bの読書について整理すると、子どもがすすんで読書を行うには、好きなシリーズとの出会いが重要であることがわかる。そして、好きなシリーズと出会うためには、周りの大人や友達による紹介が必要であり、ある程度、課題として取り組むことも有効であると考えられる。

ここまで、後期を3つの時期に分けて、検討してきた。この時期では、子どもが、本を用意している筆者の読書力を超えるスピードや量を読めるようになってきている。当初は、1日20分、課題として読ませているが、本自体が子どもにとって興味があるものであれば、読書量

が増加するということが示唆された。その際、子どもにとって、少しの時間、忍耐を持って読めば面白くなる本である必要があり、子どもが理解できる文章でなければならない。

さらに、学校から借りてくる本は、子どもにとって、家にある本とは異なる特別な意味を持っており、読書の幅が広がるきっかけとなっている。学校の先生は、子ども一人ひとりの読書力にあった本を適切に手渡すことで、子どもの読書力をつける助けとなるであろう。

また、電子書籍を用いることで、子どもが未知の語彙と出会った時に、その単語を長押しするだけで、英英辞書で意味を調べることができる。そして、読み終えた際には、シリーズの次の本や関連する本が提示され、子どもが次の本へと自然に向かうことができる。シリーズの本を続けて読むことで、読書速度もますます増加していることも明らかになっている。

## 総合考察

この論文は、日本人家庭からインターナショナルスクールに通う2人の子どもの読書がどのように変化しているのかについて、読書記録を元に分析を加えたものである。その結果、子どもの選書は、子ども自身の好みによって、家にある本の中から選び取っていく様子が示された。そして、その選書の際には、親や先生のすすめだけではなく、身近な友達が読んでいたということが影響していた。また、幼児用の簡単な本も、子どもが自分で英語を読み始める時期には役立つ。そして、1日10分、20分と決められた時間、読書を行うことで、徐々に、語彙が増え、読みがスムーズになっていくことが明らかになった。さらに、電子書籍を利用することで、わからない語彙に対するストレスが軽減され、より語彙レベルの高い読書を行うことができ、話の面白さに引き込まれて、シリーズを読み進めていくうちに、読書レベルが高まっていく様子も明らかになった。

よって、日本の小学校教育における外国語及び外国語活動においても、教室内や図書館に、様々なレベルの様々な分野の本を大量に用意しておくことで、子ども自身が読書へと向かうと考えられる。初期の段階では、担任の先生等による読み聞かせが必要であると考えられるが、子どもが読みを習得し、本の内容に魅力を感じ始めると、指導者の英語力を超えて、語彙を身につけ、読書ができるようになってくる。その際、タブレット等の使用も効果的であると考えられる。

但し、この研究は、母親が記録できた読書のみであり、子どもが学校や母親の目に届かないところで読んだ本については正確にカウントできていないわけではない。また、新しい本については、子どもが母親に購入を依頼するため、把握することができるが、再読についても、全てカウントできていないわけではないという課題が残る。今後、子どもに読んだ本の全てを記録してもらうという工夫を行って検討することを今後の課題としたい。

さらに、本研究では、家庭における子どもの読書支援についての分析が中心であり、学校の読書指導については子どもから得た情報しか分析できていない。学校の先生に対して、イ

インタビューを行い、どのような読書指導を行っているのかについての全体像を把握し、日本の読書指導との比較を行うことを今後の課題としたい。

## 引用文献

About oxford reading tree

<https://www.oxfordowl.co.uk/for-home/find-a-book/oxford-reading-tree-levels/>

2018年12月31日確認

ベネッセ (2006) 第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査) 報告書 <https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3182> 2018年12月30日確認

東本 裕子 (2018) 海外生活を経験した家庭が子供の教育機関としてインターナショナル・スクー

ルを選択した理由:4家庭によるインタビュー調査から 人文社会科学論叢 (27) 97-108

文部科学省 (2009) 小学校学習指導要領 平成20年3月告示 東京書籍

文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 平成29年3月 東洋館出版社

大城賢 深澤真 (2018) 小学校外国語活動及び外国語導入に対する小学校教員の意識：小学校教員

に対するアンケート調査の分析 琉球大学教育学部紀要 93 53-67

## 本文中に取り上げた絵本及び児童書

Leo Lenoi (1963) swimmy Knopf Books Young Readers

松谷みよ子 (2006) いないいないばあー英語版 アールアイシー出版

松谷みよ子 (2006) いいおかおー英語版 アールアイシー出版

松谷みよ子 (2006) もうねんねー英語版 アールアイシー出版

Eric carle (1999) From head to toe, Harper Collins

Bill Martin Jr (1996) Brown bear, Brown bear, What do you see?, Henry Holt books for young readers

Bill Martin Jr (2006) Panda bear, Panda bear, What do you see?, Henry Holt books for young readers

Linda Ward Beech (2007) Sight Word Readers: Learning the first 50 sight words is a snap!, Scholastic teaching resources

Alyssa Satin Capucilli (2005) Biscuit Storybook Collection, Harper Festival

Kevin Henkes (1993) Owen, Greenwillow books

Jane Yolen (1987) Owl moon, Phinomel books

Jonathan London (2005) Froggy's baby sister, Puffin books

Jonathan London (2010) Froggy goes to camp, Puffin books

Mike Thaler (2008) The dentist from the black lagoon, Cartwheel books

Mike Thaler (1997) The librarian from the black lagoon, Scholastic

Dav Piley (2000) Ricky Ricotta's Mighty robot, Blue sky

Bonnie Worth (2003) The cat in the hat: Cooking with the cat (Dr.Seuss), Random house books for young readers

Violet Findley, Kama Einhorn (2009) Folk & Fairy tale easy readers: 15 classic stories that are just right for young readers, Scholastic teaching resouces

Lucy Rosen (2010) Spider-man phonics fun, Festival

Lucy Rosen (2012) Superman phonics fun, Harper Collins

Ben Denne (2011) First encyclopedia of seas & oceans, Usborne books

Mary Pope Osborne (2008) Magic tree house1 Dinosaurs before dark, Red fox

Megan McDonald (2010) Judy Moody Goes to College, Candlewick

Barbara Park (1992) Junie B. Jones and the stupid smelly bus, Random house books for young readers

Jim Benton (2004) Lunch walks among us (Franny K.stein, mad scientist, Simon & Schuster books for young readers

Ron roy (1997) A to Z mysteries: The absent author, Random house books for young readers

Paula Danziger (2006) Amber Brown is not a crayon, Puffin books

Erin Hunter (2009) Warriors#1: Into the wild (Warriors: The prophecies begin), HarperCollins

Jeff Kinney (2012) Diary of a wimpy kid, Puffin

J.K.Rowling (1999) Harry Potter and the Sorcerer's stone, Scholastic paperbacks

Enid Blyton (2010) The naughtiest girl: Naughtiest girl in the school Book1, Hodder Children's Books

Enid Blyton (2016) The twins at St Clare's, Hodder Children's Books

Enid Blyton (2016) Malory towers collection1, Hoddder Children's BOoks

Chris Colfer (2012) The land of stories : the wishing spell, Little, Brown books for young readers